コロナ禍明けの敬老式

敬老の日

敬老の日にあわせて県の高齢化率が発表されました。7月1日時点におけるにかほ市の65歳以上の高齢者の割合、いわゆる高齢化率は40・9％で、県全体の高齢化率39・3％を上回りました。ですが、県内25市町村のうちでは19番目と比較的高齢化率の低い地域ではあります。ちなみに、県内でいちばん高齢化率が低いのは秋田市の32・6％です。若者の多くが秋田市に集中していることがわかります。ただ、その秋田市でも全国平均29・1％を大きく上回っているのが現状です。

コロナ禍が明け、市では4年ぶりに9月下旬から10月中旬にかけて5回にわたり敬老式を開催しました。75歳以上の皆さんを案内させていただき、649名、対象者の12・4％の方々に参加していただきました。この参加率が高いか、低いかの議論はありますが、コロナ禍明けということもあり、まだ大人数が集まる場所にでかけることをためらう人もいるかと思われる中でしたので、このくらいの参加率も予想の範囲内ではありました。ただ、コロナ禍前からも敬老式への参加率は年々減少してきていましたので、コロナ禍の余波がさらに参加率を押し下げたのは確かだと思います。

敬老式の様子

そんな中で開催された敬老式。当日の様子は会場によってさまざまではありましたが、共通していたのはいずれの会場も活気に満ちていたということです。

式に出席された皆さんのほとんどが、男性はスーツ、女性はおしゃれ着といった出で立ちで、樟脳（しょうのう）のにおいを漂わせ、久しぶりにタンスやクローゼットからだして、おめかしして来られたんだなとわかる方もいました。ある付添いの民生委員の方が言っていましたが、「1カ月も前から敬老式を楽しみにしていて、その話ばかりする人もいるくらいですよ」というように、参加者の多くが非日常の晴れの日として敬老式を楽しみにされていたのだと思います。

そもそも高齢者の皆さんは歳を重ねるごとに外出する機会が少なくなります。そこに来てのコロナ禍です。多くの高齢者の皆さんの交流の場はほぼゼロになっていたと思います。会場のあちこちで、「久しぶりだこと」「なんとしてた」「元気だったか」といった会話が聞かれました。年1回の敬老式でしか会えない人たちがいるということだけでも敬老式をやる価値はあったと感じています。

敬老式の背景

市では敬老式の実施について8年前から検討を重ねてきました。従来の方法でやるべきか、新たな方法にしていくべきか、さまざまな議論が交わされてきました。現在、県内の多くの自治体が、行政主催の敬老式を取りやめ、補助金を交付しながらの町内会等による地域イベント方式等へと切り替えています。前述のような参加率の低さや、公平性の観点などからも敬老式を縮小あるいは廃止すべきであるとの意見が広がってきているのも事実です。

今回はそのような空気感の中ではありましたが、コロナ禍明けということもあり、それまでじっと家の中で縮こまっていた高齢者の皆さんに、敬老式をもう一度外にでる機会として使ってもらおうとの思いもあって開催しました。

目に見えない大切な何か

今回の敬老式では、ほんとうに多くの参加者の皆さんから「敬老式やってくれてありがとう」との声をいただきました。特に、平沢の敬老式で締めのあいさつをされた老人クラブ連合会会長の言葉は、ものの見方や考え方は一つではないということをあらためて感じさせてくれましたし、費用対効果や数値だけでは推しはかることのできない大切な何かがあるということを教えてくれました。

今回の敬老式は、人生の諸先輩方の元気の良さと年季の違いを強く感じさせてくれる私にとって意義深いものでした。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。